

1977. 12. 10

日本産業教育学会和国中部地区研究会
於 愛知県中小企業センター

高校職業教育個性化の現実と課題

佐々木亨
(名古屋大学)

はじめに

高校の職業教育の問題を考へようとする場合、職業学科に固有の問題を考へる場合であっても、高校教育という全体のなか位置づけ考へることも必要であるように思われる。同じことは、普通科についてもいえる。大学入試制度問題は、とりわけ普通科の関心事があるにはちがいないが、普通科固有の問題ではなく、高校教育全体との関係で考察すべきものである。

高校教育の全体をみた場合、今日の高校教育において改革を迫られている問題は、むしろ普通科に多いと考へられる。したがって、職業学科の教育の改革問題も、普通科の改革と合わせて検討すべきものと思われるが、ここでは、時間の制約等の関係で、高校の職業学科の教育に固有の若干の問題について検討する。

I

高校職業教育、あるいは個々の高校の職業学科の教育の個性化という問題について考へてみたい。高校教育に用いては似たようなこととして「多様化」とか「分化」などもあろうが、これらは今日ではそれぞれ固有の意味を与えられているので、ここでは「多様化」とか「分化」とは違つた意味で「個性化」ということで考へよう。

*戦後日本の中等教育における「多様化」とか「分化」の意義自体、別に検討して検討に価する問題であるか、ここではおこなない。

戦前の実業学校の教育は、農・工・商・水産や修業年限等にバラエティがあったというよりなく、個々の学校(学科)の教育には、それぞれ何かの個性があったように思われるのである。学校の種別によつても異つた事情があるが、実証を要するか、^{*} 少なくともここでは、戦前の工業学校、それもとくに機械科に関する若干の資料を紹介しておく。

*個々の学校史を導いてみればよいのだが、私の集めてきた範囲では、戦前の、改訂の行われたそれぞれの初期のカリキュラムのせている学校史は、驚くほど少ないこと

を括弧に包んだ。

カリキュラムをまとめて個性的であったといえるかどうかは議論の余地もある。この点、普通科目の枠内取、専門学科(いわゆる座席)の枠内取には、学校による大きな差異はみられない。しかし、実習や製図の枠内取にみられる限り、「個性的」といっても大きな違いはないように思う。

戦法については、最近、東工大附属工高の行った調査から、各学科の実習枠内を掲げておく。学科によってバラツキが異なるが、機械科の場合には13~15単位に、電気科は10~12単位に、電子科は8~12単位に、それぞれ集中している傾向とかがうかがえてくる。工業化学科にはバラツキがむしろ大きい。つまり、工業化学科とその他と、工業の重要な学科では、実習単位取にみられる限り、画一化ないし平準化がすすんでいるように思われる。

実験・実習の単位取をすべて全体とあはさることは危険であるが、工業化学科を除くと、工業各学科では、専門科目の後単位取も、画一化ないし平準化している傾向がみられるから、機械、電気、電子の三学科に限らず、全体として、画一化ないし平準化がすすんでいるとみてよいであろう。この三つの学科は、工業科全体の半数を占めているから、この傾向は、工業科全体についても、かなりの程度括弧することのできるのではないかとと思われる。

専門教育の画一化ないし平準化は、もちろん理由のあることである。結果のよいのは、この画一化の傾向は、いわば平準化された学力をもつ労働者を供給してきたといえる点で、積極的に評価されるべきものである。また、高校の職業教育が戦後とちがって、「中等教育」として実施されているという点からみて、ある程度は必然であったともいわれてはならない。

II

高校教育の全体については、画一化しているとはいえない。戦後の中学校のカリキュラムは、一種課程、二種課程の区別があったことで、事実上二種類しかカリキュラムはなかったから、全く画一的なものであったといえる。今日の高校のカリキュラムは、たゞそれとは、いわゆる絶対必修の教科目を除けば、すべて選抜制となっている——学科の種類も生徒は各自学校設置者が選抜しているといえる——から、きわめて多様である*。

* 普通科についても多種のカリキュラムが現れているが、その画一性か問題とすると一見矛盾した現象があるのは、多様な実態が大学入試制度に向けて画一化しているからである。個々の大学(学部)が——今後は国大協の共通一次テストも——受験科目と指定するようになつたためにこの意味での画一化がすすんできたといつてもよいように思われる。

いっほう、高校の職業学科は、戦前の実業学校にくらべると、画一化ないし平均化の傾向が著しいといえるように思われる。年限も短かくなると、専攻科目についてさまざまな制約をくわえているからだという非難(?)もありうるので、画一化ないし平均化は勿論でもあったことと確めておくことは必要である。

高校の職業教育が画一化ないし平均化している最も有力な理由のひとつは、この教育がたんなる実業教育(職業教育)としてではなく、高校教育という「中等教育」の一環として行われるようになったからである。

戦前においては、実業学校は中等学校ではなかったし、その教育は中等教育ではなかった。長い年月のあいだに、いっしか(いつ頃からなのか問う必要があった)「中等(程度)実業教育」と呼ばれるようになったが、法理上の「中等実業教育」という位置づけ性格は、1943年の中等学校令で定まられるにはならなかった。(しかし、1930年代にすでに中等実業教育という名称の实体を定まっていたことは資料からみている。)

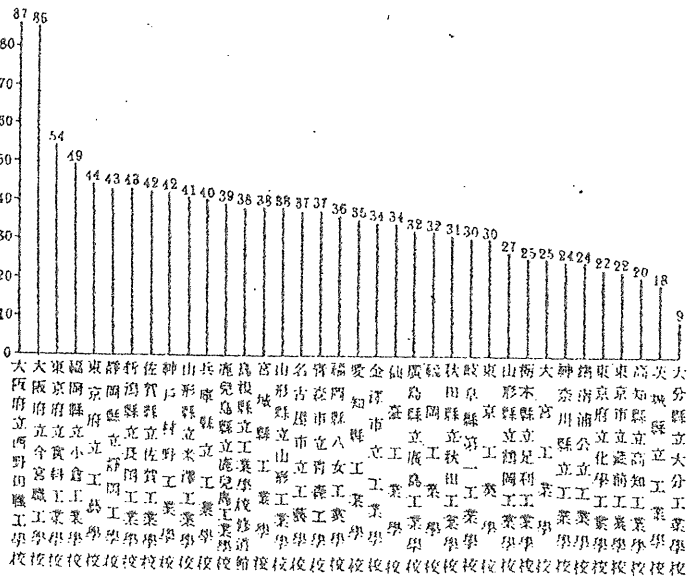
戦後改革は、旧実業学校を解体し、そこで行われてきた職業教育を、「中等教育」であり高校教育として位置づけし、再編した。そしてそのことを可能ならしめるために選択制の原理を採用された。戦後の「中等教育」概念は、その中等教育のうち職業教育をふくむに至ったという点からしても、もはや戦前と同じ中等教育ではあり得なくなつたのである。もうひとつ、高校教育は大衆的性質をよそとられたという点でも、古い中等教育ではあり得なくなつたことと指摘してはならぬ。(この意味の転換が普通科において極めて不十分なこと、今日の高校教育の最大の問題点であると認められている。)

他方、この改革によつて「中等実業教育」は甚大な影響をうけた。職業教育は、その自体と目的とするところから、新しく「中等教育」の一環として行はうことと要請されるようになった。高校の職業教育は、法理上も勿論、実態においてももはやたんなる職業教育ではなく、あくまでも高校教育という中等教育の一環として行われなければならないのである。二からさまざまな制約がくわえられたことは当然であった。その詳細は、ある程度画一化ないし平均化をたもつたことにはたつたように思うのである。

Ⅱ

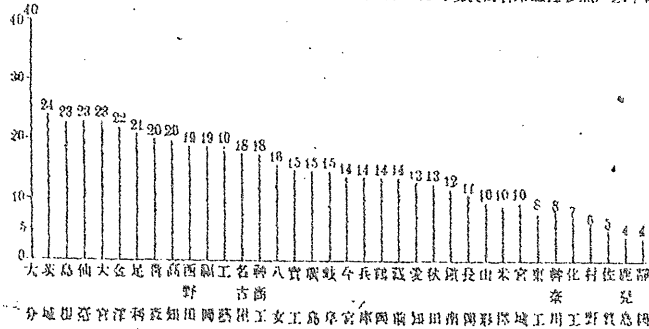
高校教育の大衆的・民主主義的性質をよそとられて誕生したというその前提のなかで、それぞれが学校(学科)の教育の個性化をけあはることは容易なことではない。職業学科の改革の方案は、画一的なものではなく、個性化をはかることにあると思われただけで、それは、職業科(職業高校)にのみ力でやりおこすとは思われない。しかし、行政当局の努力、教職員集団の努力、生徒集団や地域父母の協力が理解するところまで進まなければ、進まないこともあつたと思われようである。

第1圖 工業學校機械科實習授業時數 (一週延時數, 以下同じ)

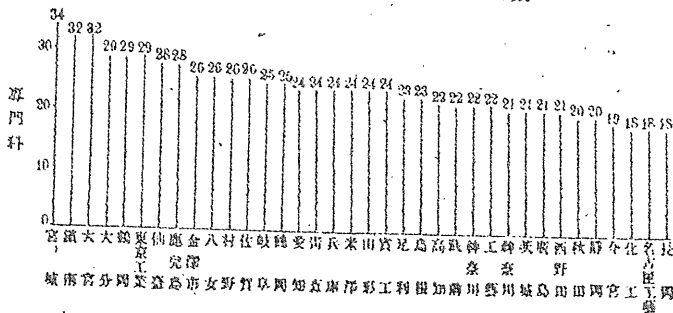


(出所) 阿部巽「工業学校工紹介」『教育』第4巻第9号、1914年12月。
 ②は2と同じ。

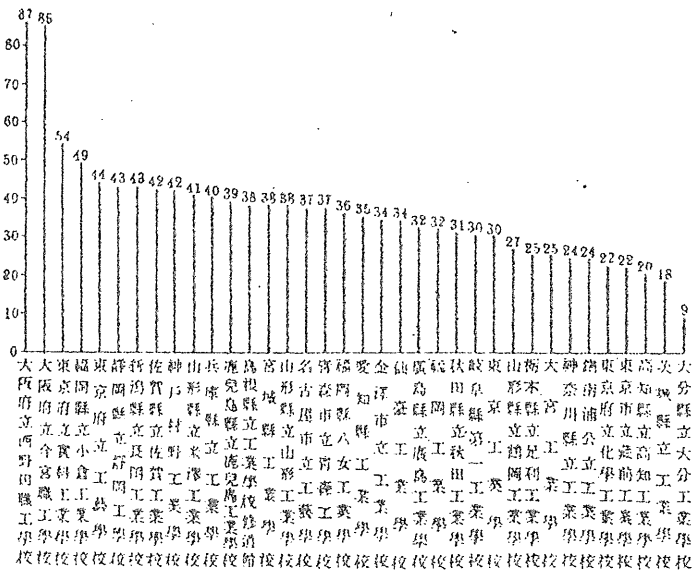
第2圖 工業學校機械科製圖授業時數(校名第三圖参照, 以下同じ)



第3圖 工業學校機械科専門學科授業時數

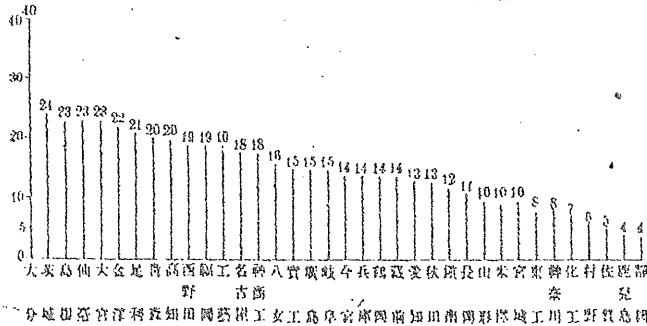


第1圖 工業學校機械科實習授業時數 (一週授時數, 以下同じ)

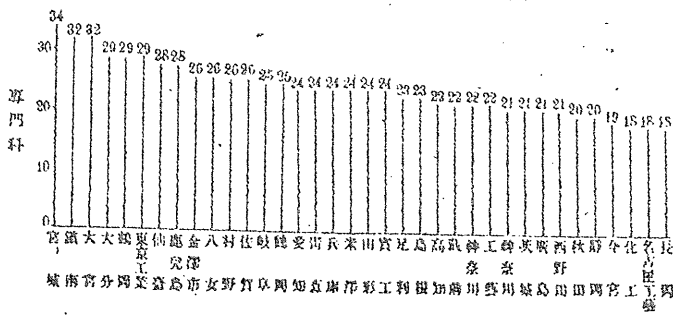


(出所) 阿部巽「工業学校工紹介予」, 『教育』第4巻第9号 1931年12月。
 ②は2'同じ。

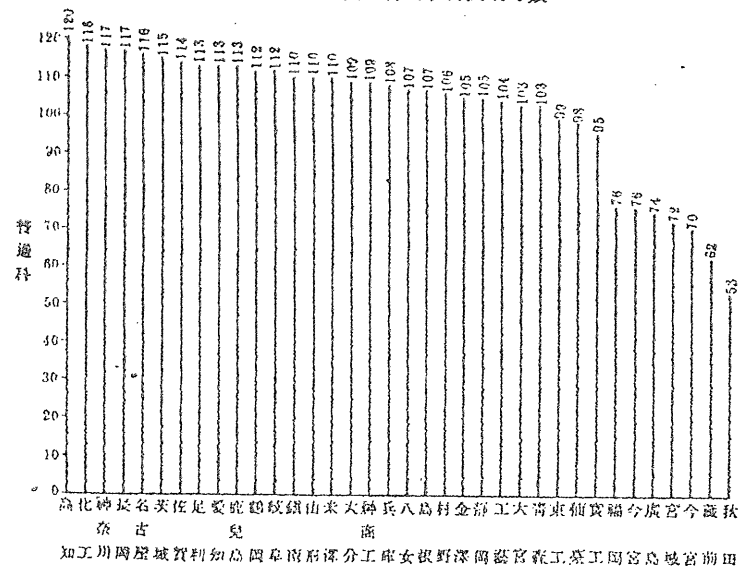
第2圖 工業學校機械科製圖授業時數(校名第三圖參照, 以下同じ)



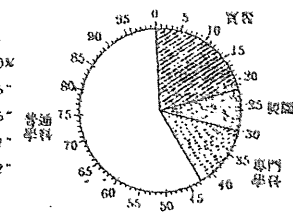
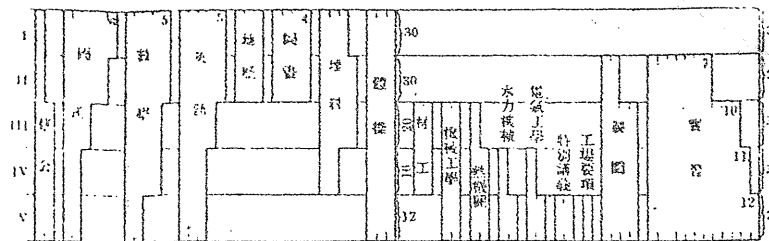
第3圖 工業學校機械科專門學科授業時數



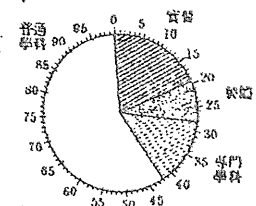
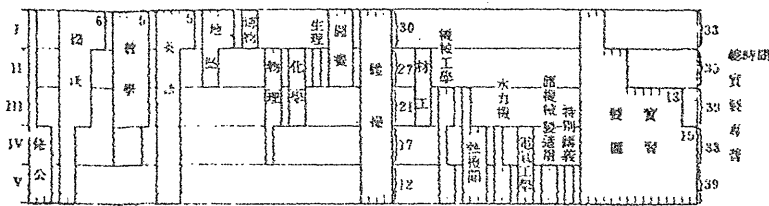
第4圖 工業學校機械科普通學科授業時數



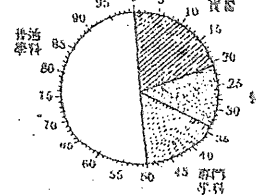
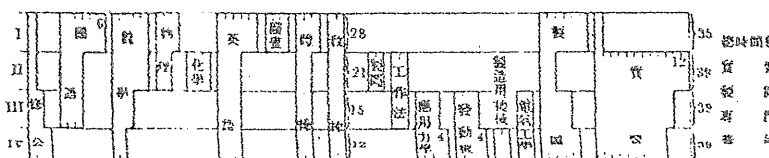
第7圖 兵庫縣立工業學校



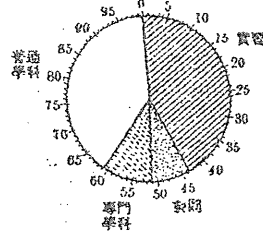
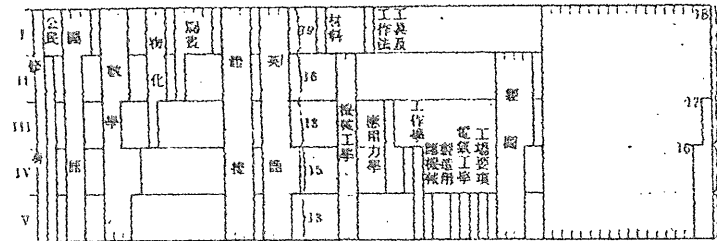
第十圖 福岡縣八女工業學校



第9圖 福岡工業學校 (高卒)



第5圖 大阪府立今宮職工學校



第6圖 東京府立實科工業學校

